

# プロスポーツチームとまちづくりに関する研究

## —チームと拠点地域住民の共同参画型プロジェクトの開発と展開—

工藤康宏\*  
舟木泰世\* 梶原 健\*\* 野川春夫\*

### 抄録

本研究は、プロスポーツチームの拠点施設近隣住民のソーシャルキャピタルの測定を行うと共に、チームと住民によるまちづくりに向けた共同参画型プロジェクトの開発と展開を試みることを目的とした。本研究は、2つの社会調査と1つのプロジェクトからなる。1つ目の調査は、2012年に実施された調査で使用した指標を用いた、プロスポーツ観戦を行う住民のソーシャルキャピタルの測定である。2つ目の調査は、プロスポーツチームの拠点施設の近隣に在住する住民に対するソーシャルキャピタルの測定である。またプロジェクトは、プロスポーツチームを足掛かりとしたまちづくりをプロスポーツチーム関係者と地域住民が共同で考える取り組みとしてプロジェクト・サイクル・マネジメント（PCM）とプロジェクト・デザイン・マネジメント（PDM）の手法の導入を試みた。

その結果、観戦者調査では2012年の調査と同様に、ソーシャルキャピタルの高い群において地域のプロスポーツチームを積極的に受け入れている結果が得られた。また、拠点施設近隣住民と観戦者のソーシャルキャピタルを比較したところ、観戦者の方がソーシャルキャピタルが統計的に有意に高いことが明らかとなった。特に「お互い様だから、という支えあい」を表す互酬性の規範の要因の中でも、地域活動への参加項目において、一般の住民よりも試合観戦を行う住民の方が、統計的に有意に高い点が注目される。

プロチームと地域住民との共同参画プロジェクトの推進において、PCM・PDMの手法が有効であることが認められたが、現場での実施においてはその手法に熟知し、十分なトレーニングを積んだモデレーターの役割が重要であることが明らかとなった。

キーワード：プロスポーツチーム，地域住民，ソーシャルキャピタル，PCM・PDM，まちづくり

---

\*順天堂大学スポーツ健康科学部 〒270-1695 千葉県印西市平賀学園台1 - 1

\*\*千葉ジェッツ 〒273-0031 千葉県船橋市西船4 - 1 9 - 3 西船成島ビル4 階

# Professional Sport Team and Community development.

—Development of the joint project of a team and inhabitants.—

Yasuhiro KUDO\*  
 Yasuyo FUNAKI\*      Ken KAJIWARA\*\*      Haruo NOGAWA\*

## Abstract

The purpose of this study was to examine relationships between a professional sports team and community development. The study consists of two phases. The first phase of the study investigated the social capital of the game spectators and the inhabitants who lived near the home arena (Funabashi arena) of National Basketball League team (Chiba JET's). We conducted a mailing method survey with the community members and a survey with the spectators. The second phase of the study aimed facilitates the community development project that a team and inhabitants performed jointly. For a join project, the Project Cycle Management (PCM) / Project Design Management (PDM) technique was applied.

The results of this study showed that the level of social capital of community members living near the home arena were grouped into 'high' and 'low' groups. The characteristics of spectators were identified. In two items 'frequency of talking about the team in daily life' and 'changes in the community', 'high' group significantly higher compared to 'low' group demonstrated social capital score there was a significant difference. It is likely that 'high' social capital group accepts a team more positively in their community.

In addition, when comparing the social capital of the spectators with the home arena neighborhood inhabitants, it was revealed that a social capital was significantly higher in the spectators.

As a joint project of the community development, the study indicated that technique of PCM/PDM functioned effectively. However, when the joint project carries out through PCM/PDM technique, the role of the moderator who has acquired enough training and extensive knowledge of the PCM/PDM technique is very important.

**Key Words :** Professional Sport Team, Community Members, Social Capital, PCM/PDM(Project Cycle Management/Project Design Management), Community Development.

---

\* Juntendo University 1-1, Hiragagakuendai, Inzai, Chiba 270-1695 Japan

\*\* CHIBA JETS Nishifunanarushimabuilding, 4-19-3, Nishifuna, Funabashi, Chiba 273-0031 Japan

## 1. はじめに

まちづくりに効果的と考えられているスポーツとソーシャルキャピタルの研究について、地域スポーツクラブとソーシャルキャピタルに関する研究（中西，2005；長積ら，2006；行實，2009；河原，2007；Okayasu et al., 2010）やプロスポーツチームと地域愛着という視点の研究（二宮，2010，；二宮，2011）は散見されるものの、プロスポーツチームとソーシャルキャピタルについての研究や、その経年的な変化を捉えようとした研究はほとんど見られない。本研究では2012年度の助成研究に続き、拠点地域住民のソーシャルキャピタルを継続測定しその経年変化を捉えることを試みる。

また2012年度の研究知見から、チーム・住民共に相互的関係を望んでいるにも関わらず具体的活動に結びついていないことが明らかなため、まちづくりに向けた共同参画型プロジェクトの開発・展開を試みることを目的とする。その際には、国際協力での開発援助プロジェクトの際に有効とされるPCM（プロジェクト・サイクル・マネジメント）・PDM（プロジェクト・デザイン・マトリックス）を用いて、運営・管理、評価を行う（JICA,2007;高千穂,2009;渡辺,2010）。

2012年度の助成研究の指標を継続測定することで、チームと拠点地域との関係や、チームが拠点とすることによるコミュニティの変化などを経年的に調査することが可能となり、プロスポーツチームと地域のソーシャルキャピタルの関係を明らかにする足がかりとなると考えられる。またその知見を踏まえ、共同参画型プロジェクトを開発・展開し、PCM・PDMを用いて管理・運営することで、プロスポーツチームやスポーツを足がかりとしてまちづくりを進めようとする地域や地域コミュニティの再生に取り組もうとする地域に対して、活用事例とできるような、より一般化した資料を提供できると考えられる。

## 2. 目的

「プロスポーツチームとまちづくりに関する研究～bjリーグ新規参入チームの拠点地域における住民のソーシャルキャピタルに着目して～」(研究代表者：舟木泰世)の継続研究として、拠点地域住民のソーシャルキャピタルの測定を継続して行うと共に、チームと住民によるまちづくりに向けた共同参画型プロジェクトの開発と展開を試みることを目的とした。

## 3. 方法

本調査は、2つの社会調査と1つのプロジェクトからなるものである。1つ目の調査は、2012年に実施された調査で使用した指標を用いた、プロスポーツ観戦を行う住民のソーシャルキャピタルの測定である。2つ目の調査は、プロスポーツチームが拠点としている船橋アリーナ近隣に在住する住民に対するソーシャルキャピタルの測定である。また、プロジェクトとは、プロスポーツチームを足掛かりとしたまちづくりをプロスポーツチーム関係者と地域住民が共同で考える取り組みと、それを実施しやすくするためのフレームとしてPCM・PDMの手法の導入を試みたものである。以下、それぞれの方法について説明する。

### 1) プロスポーツ観戦者調査

#### (1) 調査方法と対象者

千葉ジェッツホームゲームの観戦者に対して質問紙調査を実施した。調査期日はNBLリーグ2013-2014シーズンの千葉ジェッツ対トヨタ自動車アルバルク東京戦の2013年11月23日(土)に行った。試合会場への来場時間によって観戦動機や属性が異なることが予想されたため、①開場前、②開場後、③試合開始直前に分け質問紙を配布した。①開場前では、開場を待つ観戦者に対し、調査員が質問紙を直接手渡し、その場で記入後回収した。②開場後は、観戦者が入場し席について落ち着いたところを見計らい、調査員が直接質問紙を手渡し、記入後その場で回収、または後で回収した。③試合開始直後は、入り口で質問紙を配布し、ハーフタイムおよび試合終了後に回収を呼び掛けた。なお試合終了後、出口にて最終の回収を呼び掛け、回収を行った。

配布数は500部、回収数は362部、有効回答数は361部（有効回答率72.2%）であった。

#### (2) 調査内容

質問項目は2012年の調査で用いた、基本的属性6項目、NBLリーグ試合観戦について7項目、ソーシャルキャピタルに関する3要因（「ネットワーク」、「信頼」、「互酬性の規範」）24項目とした。ソーシャルキャピタルに関する項目については、河原（2007）、Okayasu et al. (2010)、舟木・野川（2012）らを参考に設定した。

#### (3) 分析方法

観戦者調査については、サンプル全体の傾向を把握するために単純集計ならびにクロス集計を行った。ソーシャルキャピタル測定項目については、6段階リッカートタイプ尺度を用い、1点（全くない

全く当てはまらない) から6点(よくある/非常に当てはまる)まで順に得点を与え等間隔尺度と仮定した。ソーシャルキャピタル算出方法は、各項目ごとに合成得点を算出し、平均値と標準偏差を求めた。また、3要因24項目の合成得点をソーシャルキャピタル度とした。なお、ソーシャルキャピタル測定項目に関しては、全24項目に回答があったサンプル(N=341)のみを抽出して分析を行った。

ソーシャルキャピタル測定項目に関する尺度の信頼性の検証については、Cronbachの $\alpha$ 係数を用いた。その結果、「ネットワーク」要因(3項目)は0.779、「信頼」要因(11項目)は0.909、「互酬性の規範」要因(10項目)は0.928の値を示し、一定の信頼性が確認された。統計処理は、統計パッケージSPSS Statistics19.0 for Windowsを用いて行った。

## 2) 拠点施設近隣住民の調査

### (1) 調査方法と対象者

千葉ジェッツが活動拠点としている船橋アリーナ近隣に在住する住民に対して、郵送法による質問紙調査を実施した。社会調査を行う場合、まずは選挙人名簿からの無作為標本抽出、選挙人名簿の使用が許可されない場合には住民基本台帳から抽出するのが一般的だとされている(岩井・稲葉, 2006)。そこで本調査においても、船橋市選挙管理委員会事務局が管理する選挙人名簿の使用申請を行い、古和釜、高根台、坪井町、坪井西、坪井東、習志野台、松が丘の7地域から標本抽出を行った。抽出においては、7地域の総人口を100%としたときの各地域の人口が占める割合を算出し、本調査の標本抽出予定数である1,000名に乘じ、各地域からの抽出数を定めた。さらに、人口が4万人未満の自治体から無作為に抽出する際に妥当な間隔とされる11人間隔で、各地域の選挙人名簿から20歳~70歳未満の住民を対象に標本を抽出、氏名、住所、性別、年齢確認のため生年月日を記録紙に書き写した。

抽出されたサンプルに対し、質問紙および、調査への回答は任意であることを記載した調査協力のお願ひ状、切手を貼った返信用封筒を同封し、郵送した。2014年2月1日に発送し、質問紙に回答の上2014年2月12日までに投函するよう求めた。2014年2月15日を最終締め切りとした結果、郵送1,000部に対し、返送されたのは181部で有効回答数は172部であった。

### (2) 調査内容

質問項目は基本的属性6項目、観戦者との比較を行うため、観戦者調査で使用したソーシャルキャピ

タルに関する3要因(「ネットワーク」、「信頼」、「互酬性の規範」)24項目、千葉ジェッツの認知度および観戦経験とした。ソーシャルキャピタルに関する項目については、河原(2007)、Okayasu et al.(2010)、舟木・野川(2012)らを参考に設定した。

### (3) 分析方法

拠点施設近隣住民調査については、観戦者調査と同様にサンプル全体の傾向を把握するために単純集計ならびにクロス集計を行った。ソーシャルキャピタル測定項目についても同様で、6段階リッカートタイプ尺度を用い、等間隔尺度を仮定した。ソーシャルキャピタル算出方法も同様に、各項目ごとに合成得点を算出、平均値と標準偏差を求めた。また、3要因24項目の合成得点をソーシャルキャピタル度とした。ソーシャルキャピタル測定項目に関しては、全24項目に回答があったサンプル(N=157)のみを抽出して分析を行った。

ソーシャルキャピタル測定項目に関する尺度の信頼性の検証については、Cronbachの $\alpha$ 係数を用いた。その結果、「ネットワーク」要因(3項目)は0.827、「信頼」要因(11項目)は0.882、「互酬性の規範」要因(10項目)は0.900の値を示し、一定の信頼性が確認された。

これらの統計処理は、統計パッケージSPSS Statistics19.0 for Windowsを用いて行った。

### 3) プロチームと住民の共同参画型プロジェクト

プロチームとチームが所在する地域住民との間で、互いに共同してまちづくりに向けた良好な関係を作るために、PCM・PDMの手法を用いることを試みた。はじめに、PCM計画立案をよりよく推進するために、事前に民間のIC Net株式会社が主催する3日間の研修(2013年8月10日~12日)に参加し、一定の知識、スキル基準を満たし修了証の発行を受けた。そのうえで、千葉ジェッツ側の協力により、拠点地域においてまちづくりや地域の問題にかかわることが多い住民2名を抽出し、さらに千葉ジェッツにおいて広報活動や地域貢献活動担当を交え、PCM計画立案を実施した。

プロジェクト推進に当たっては、2013年11月~2014年2月にかけて、数度の打ち合わせとPCMの立案を行ったが、最終的にPDMに落とし込むことができたのは2014年2月12日であった。PCM計画立案とその成果物、手順と留意点については、結果および考察の部分で提示する。

#### 4. 結果及び考察

##### 1) プロスポーツ観戦者調査

###### (1) サンプルの個人的属性

本調査のサンプルの属性は、男性 48.2%、女性 50.1%であった。年代は 10 代 (26.3%)、40 代 (23.3%)、30 代 (22.7%)、20 代 (15.8%) の順で多く、50 代以上は約 1 割程度を占めていた。この試合では、学生無料キャンペーンが展開されていたため 10 代が多かったと考えられる。職業は会社員 (35.2%) が最も多く、次いで専業主婦・主夫 (11.6%) であった。居住地は船橋市 46.5%、船橋以外の千葉県 38.5%、千葉県以外 12.7% の順であった。居住年数は 10 年以上 20 年未満 (36.8%) が最も多く、10 年未満 (34.9%)、20 年以上 (24.7%) の順であった。運動実施頻度は「全くやっていない (33.2%)」と「週に 3 日以上 (32.1%)」がほぼ同じ割合であった。

表 1. サンプルの個人的属性(観戦者)

項目	%	n	項目	%	n
<b>性別</b>					
男性	48.2	(174)	<b>年代</b>		
女性	50.1	(181)	10代	26.3	(95)
無回答	1.7	(6)	20代	15.8	(57)
合計	100	(361)	30代	22.7	(82)
<b>職業</b>					
会社員	35.2	(127)	40代	23.3	(84)
会社役員	2.8	(10)	50代	8.3	(30)
公務員・教員	6.1	(22)	60代	1.7	(6)
自営業	2.5	(9)	70代以上	1.1	(4)
自由業	0.8	(3)	無回答	0.8	(3)
専業主婦・主夫	11.6	(42)	合計	100	(361)
専門学生	0.3	(1)	<b>居住地</b>		
大学・大学院生	1.7	(6)	船橋市	46.5	(168)
中学・高校生	26	(94)	船橋以外の千葉県	38.5	(139)
無職	2.8	(10)	千葉県外	12.7	(46)
パート・アルバイト	9.4	(34)	無回答	2.2	(8)
その他	0.6	(2)	合計	100	(361)
無回答	0.3	(1)	<b>運動実施頻度</b>		
合計	100	(361)	やってない	33.2	(120)
<b>居住年数</b>					
10年未満	34.9	(126)	年に1~3回	3.9	(14)
10年以上20年未満	36.8	(133)	3か月に1~3日	4.2	(15)
20年以上	24.7	(89)	月に1~3日	10.2	(37)
無回答	3.6	(13)	週に1~2日	16.1	(58)
合計	100	(361)	週に3日以上	32.1	(116)
			無回答	0.3	(1)
			合計	100	(361)

###### (2) 試合観戦について

千葉ジェッツの試合観戦については、ホームゲームであるため、約 8 割が千葉ジェッツを応援に来場しているが、ブースタークラブ会員は 18.0% と低い入会率であった。昨シーズンの観戦経験は、1~5 回が最も多く、今回初めて観戦したサンプルが約 3 割程度存在した。チケット種別では、通常のチケット (55.4%) がもっとも多く約半数を占め、次いで会員・特典チケット (28.8%) が約 3 割を占めており、シーズンチケットは 3.3% と低い割合であった。

日常生活の中におけるチームの話題を話す相手

については、家族 (59.1%) が約 6 割を占め、学校・職場の友人 (39.7%)、地域の友人 (25.6%) が続いた。

表 2. 試合観戦について

項目	%	n
<b>応援チーム</b>		
千葉ジェッツ	78.7	(284)
アルベルク東京	12.2	(44)
どちらでもない	8.3	(30)
無回答	0.8	(3)
合計	100	(361)
<b>ブースター入会状況</b>		
入会している	18.0	(65)
入会していない	80.3	(290)
無回答	1.7	(6)
合計	100	(361)
<b>2012-2013シーズン観戦回数</b>		
0回	28.8	(104)
1~5回	45.7	(165)
6~10回	11.1	(40)
11回以上	11.4	(41)
システム欠損値	3	(11)
合計	100	(361)
<b>チケット種別</b>		
シーズンチケット	3.3	(12)
通常チケット	55.4	(200)
会員チケット		
特典チケット	28.8	(104)
その他	4.2	(15)
無回答	3.6	(13)
合計	100.0	(361)

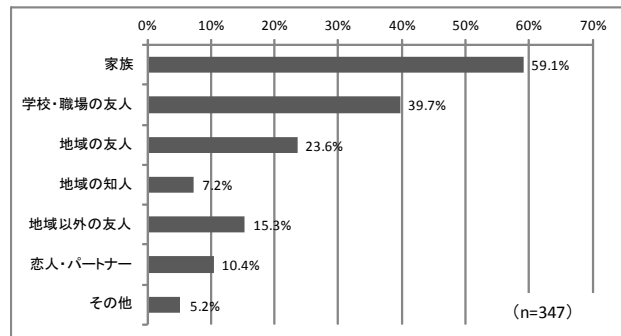


図 1. チームの話題

###### (3) 試合観戦者のソーシャルキャピタルについて

表 3 は、試合観戦者のソーシャルキャピタル各項目の平均値である。6 段階尺度の 4 点を越える高い平均値が示されたのは地域や近所での付き合いに関する項目である「近所の人とのあいさつ (4.90)」「近所の友人知人と連絡 (4.37)」の 2 項目と、地域に関する感情を示す「出張・旅行後この地域に帰ってきた時、ホッとする (4.60)」「地域に愛着がある (4.40)」の 2 項目であった。

6 段階尺度中 2 点台という低い平均値を示したのは、地域での活動に関わる項目である「防災活動への参加 (2.93)」「町内運動会やスポーツ・レク活動への参加 (2.91)」「地域のスポーツ活動での指導への参加 (2.52)」「文化活動への参加 (2.21)」であった。日常生活の中での挨拶や会話、地域への愛着に関する項目

が比較的平均値が高いのに対して、地域での活動への参加は低調である様子がうかがえる。

表 3. ソーシャルキャピタル各項目の平均値(観戦者)

項目	(n)	mean	SD
近所の人とあいさつ	(341)	4.90	1.380
近所の人と立ち話	(341)	3.51	1.702
近所の友人知人と連絡	(341)	4.37	1.667
地域に関する話をするところがある	(341)	3.78	1.560
地域での活動に協力することがある	(341)	3.55	1.576
自分が困ったとき地域の人が助けてくれる	(341)	3.65	1.530
地域の話し合いに参加する	(341)	3.04	1.631
地域でお互いへの気配りがある	(341)	3.78	1.515
近所の家との交流がある	(341)	3.87	1.636
子どもを近所に預かってもらう	(169)	3.21	1.654
※: 子供がいないサンプル(n=173)を除く			
人からこの地域の悪口を言われたら、何か自分の悪口を言われた気分になる	(341)	3.70	1.319
出張・旅行後この地域に帰ってきた時、ホッとする	(341)	4.60	1.239
地域の人仲間だと思ふ	(341)	3.89	1.370
地域に愛着がある	(341)	4.40	1.276
防犯や交通安全活動への参加	(341)	3.10	1.654
清掃美化活動への参加	(341)	3.29	1.704
防災活動への参加	(341)	2.93	1.566
お祭りなど町内会行事の手伝いへの参加	(341)	3.21	1.677
町内運動会等への参加	(341)	2.91	1.660
地域のスポーツ活動での指導への参加	(341)	2.52	1.651
文化活動への参加	(341)	2.21	1.480
町内会行事への関心がある	(341)	3.41	1.542
市議員を出すことは大切	(341)	3.52	1.550
この地域のために何かの役に立ちたい	(341)	3.39	1.422

表 4 は 2012 年の調査結果との比較である。ほとんどの項目で同じような平均値が得られている一方で、信頼を表す「地域に対する感情」に関する項目のうち4項目において統計的に有意な差が認められ、今回のサンプルよりも 2012 年のサンプルの方がソーシャルキャピタルの平均値が高い結果となった。この背景としては 2012 年はシーズン初戦でかつホーム開幕戦が調査対象であったことが推察される。

表 4. SC 各項目の平均値 2012-2013 年比較(観戦者)

項目	2012年			2013年		
	(n)	mean	SD	(n)	mean	SD
近所の人とあいさつ	(384)	4.99	1.273	(341)	4.90	1.380
近所の人と立ち話	(384)	3.67	1.593	(341)	3.51	1.702
近所の友人知人と連絡 **	(384)	4.02	1.708	(341)	4.37	1.667
地域に関する話をするところがある	(384)	3.73	1.488	(341)	3.78	1.560
地域での活動に協力することがある	(384)	3.47	1.573	(341)	3.55	1.576
自分が困ったとき地域の人が助けてくれる	(384)	3.53	1.481	(341)	3.65	1.530
地域の話し合いに参加する	(384)	3.09	1.532	(341)	3.04	1.631
地域でお互いへの気配りがある	(384)	3.75	1.486	(341)	3.78	1.515
近所の家との交流がある	(384)	3.94	1.661	(341)	3.87	1.636
子どもを近所に預かってもらう	(236)	3.16	1.700	(169)	3.21	1.654
※: 子供がいないサンプルを除く						
人からこの地域の悪口を言われたら、何か自分の悪口を言われた気分になる**	(384)	3.99	1.248	(341)	3.70	1.319
出張・旅行後この地域に帰ってきた時、ホッとする **	(384)	4.83	1.018	(341)	4.60	1.239
地域の人仲間だと思ふ **	(384)	4.17	1.155	(341)	3.89	1.370
地域に愛着がある **	(384)	4.66	0.989	(341)	4.40	1.276
防犯や交通安全活動への参加	(384)	2.94	1.547	(341)	3.10	1.654
清掃美化活動への参加	(384)	3.10	1.639	(341)	3.29	1.704
防災活動への参加	(384)	2.80	1.483	(341)	2.93	1.566
お祭りなど町内会行事の手伝いへの参加	(384)	3.16	1.675	(341)	3.21	1.677
町内運動会等への参加	(384)	2.99	1.634	(341)	2.91	1.660
地域のスポーツ活動での指導への参加	(384)	2.46	1.551	(341)	2.52	1.651
文化活動への参加	(384)	2.08	1.224	(341)	2.21	1.480
町内会行事への関心がある	(384)	3.30	1.409	(341)	3.41	1.542
市議員を出すことは大切	(384)	3.59	1.413	(341)	3.52	1.550
この地域のために何かの役に立ちたい	(384)	3.52	1.233	(341)	3.39	1.422

\*\* p<.01

(4) ソーシャルキャピタル度別の比較

ソーシャルキャピタル構成要因とした「ネットワ

ーク」、「信頼」、「互酬性の規範」の 3 要因 24 項目の合成得点を算出し、ソーシャルキャピタル度とした。中央値 (85.0) を基準に、85.0 未満をソーシャルキャピタル低群 (SC 低群)、85.0 以上をソーシャルキャピタル高群 (SC 高群) とした。その上で、ソーシャルキャピタルの高低による個人的属性について比較を行った。

その結果、性別以外の「年代」「居住地」「居住年数」において統計的有意差が認められた。ただし、年代においては0セルがあるため解釈には注意が必要とされる。SC 高群の方が、年代が比較的高く、船橋市に居住しており、居住年数が長い傾向が見られた。

表 5. SC 度別の属性(観戦者)

項目	SC低群		SC高群		合計	
	%	(n)	%	(n)	%	(n)
<b>性別</b>						
男性	55.2	(91)	44.8	(74)	100.0	(165)
女性	46.2	(79)	53.8	(92)	100.0	(171)
合計	50.6	(170)	49.4	(166)	100.0	(336)
<b>年代</b>						
10代	42.2	(38)	57.8	(52)	100.0	(90)
20代	87.5	(49)	12.5	(7)	100.0	(56)
30代	56.4	(44)	43.6	(34)	100.0	(78)
40代	37.2	(29)	62.8	(49)	100.0	(78)
50代	32.1	(9)	67.9	(19)	100.0	(28)
60代	0.0	(0)	100.0	(6)	100.0	(6)
70代以上	0.0	(0)	100.0	(3)	100.0	(3)
合計	49.9	(169)	50.1	(170)	100.0	(339)
<b>居住地</b>						
船橋市	45.8	(71)	54.2	(84)	100.0	(155)
船橋市以外の千葉県	51.5	(69)	48.5	(65)	100.0	(134)
千葉県以外	68.2	(30)	31.8	(14)	100.0	(44)
合計	51.1	(170)	48.9	(163)	100.0	(333)
<b>居住年数</b>						
10年未満	62.6	(72)	37.4	(43)	100.0	(115)
10年~20年未満	42.6	(55)	57.4	(74)	100.0	(129)
20年以上	47.6	(40)	52.4	(44)	100.0	(84)
合計	50.9	(167)	49.1	(161)	100.0	(328)

船橋市に居住しているサンプルのみ抽出し、SC 度別に試合観戦回数、日常でのチームの話題の出現、居住年数、千葉ジェッツができたことでの地域の変化の有無について、平均値の差の検定を行った。その結果、居住年数と地域の変化の有無について 5% 水準で有意差が認められた。SC 高群の方が居住年数が長く、千葉ジェッツができたことでの地域に望ましい変化があったと認識していることがわかった。

表 6. 観戦回数 (船橋市居住観戦者の SC 度別)

SC低群 (n=70)		SC高群 (n=80)		t値	p
mean	S.D.	mean	S.D.		
2.07	3.009	3.14	5.199	-1.56	n.s.

n.s.:no significant

表 7. 日常会話 (船橋市居住観戦者の SC 度別)

SC低群 (n=71)		SC高群 (n=84)		t値	p
mean	S.D.	mean	S.D.		
3.85	1.591	4.25	1.279	-1.724	n.s.

n.s.:no significant

表 8. 居住年数 (船橋市居住観戦者の SC 度別)

SC低群 (n=70)		SC高群 (n=82)		t値	p
mean	S.D.	mean	S.D.		
3.5775	0.76834	3.8675	0.7287	-2.401	*

\*: p<.05

表 9. 地域の変化 (船橋市居住観戦者の SC 度別)

SC低群 (n=70)		SC高群 (n=80)		t値	p
mean	S.D.	mean	S.D.		
12.36	9.386	16.28	12.9741	-2.102	*

\*: p<.05

## 2) 拠点施設近隣住民の調査

### (1) サンプルの個人的属性と観戦について

表 10 は、千葉ジェッツ拠点施設である船橋アリーナ近隣 7 地区の住民への質問紙調査結果のうち、個人的属性についてまとめたものである。

男性は 44.8%、女性は 55.2%で、2014 年 2 月時点での船橋市 7 地区の住民基本台帳による男女比は男性 49.2%、女性 50.8%であるため、サンプルはやや女性の割合が高かった。職業は会社員が最も多く 40.7%であった。年代は 40 代 (37.8%)、60 代 (19.2%)、30 代 (18.6%)、50 代 (15.7%) の順であった。居住地は習志野台地区 (55.2%) が最も多く古和釜地区が 0.6%とサンプルに偏りがある結果となった。居住年数はおおむね均等で、スポーツ・運動実施頻度は約 5 割が全くやっておらず、週に 1 日以上の実施も 25.0%と、観戦者のサンプルよりも運動実施は低い割合であった。

表 10. サンプルの個人的属性(近隣住民)

項目	%	n	項目	%	n
<b>性別</b>					
男性	44.8	(77)	<b>居住地</b>		
女性	55.2	(95)	習志野台	55.2	(95)
合計	100.0	(172)	坪井	18.0	(31)
<b>職業</b>					
会社員	40.7	(70)	古和釜	0.6	(1)
会社役員	1.2	(2)	高根台	9.9	(17)
公務員・教員	7.6	(13)	松が丘	15.1	(26)
自営業	4.7	(8)	無回答	1.2	(2)
大学・大学院生	3.5	(6)	合計	100.0	(172)
専業主婦・主夫	14.5	(25)	<b>居住年数</b>		
無職	9.3	(16)	10年未満	32.6	(56)
パート・アルバイト	16.9	(29)	10年～20年未満	28.5	(49)
その他	1.7	(3)	20年以上	37.8	(65)
合計	100.0	(172)	無回答	1.2	(2)
<b>年代</b>					
20代	5.8	(10)	合計	100.0	(172)
30代	18.6	(32)	<b>スポーツ実施頻度</b>		
40代	37.8	(65)	やっていない	46.5	(80)
50代	15.7	(27)	年に1～3日	4.7	(8)
60代	19.2	(33)	3か月に1～3日	5.8	(10)
70代以上	2.3	(4)	月に1～3日	14.0	(24)
無回答	0.6	(1)	週に1～2日	18.6	(32)
合計	100.0	(172)	週に3日以上	6.4	(11)
<b>合計</b>					
			無回答	4.1	(7)
			合計	100.0	(172)

スポーツクラブ・同好会加入状況は、加入したことがないサンプルが約半数で、現在加入しているサンプルが 23.3%、過去に加入していたものが 27.9%であった。加入クラブのタイプは、地域住民中心のクラブ (11.0%) が最も多かった。

表 11. スポーツクラブ・同好会加入状況

項目	%	(n)
<b>クラブ・同好会加入状況</b>		
加入している	23.3	(40)
過去に加入、現在は非加入	27.9	(48)
加入したことがない	47.1	(81)
無回答	1.7	(3)
合計	100.0	(172)
<b>加入クラブのタイプ</b>		
地域住民中心	11.0	(19)
民間会員制	9.3	(16)
学校OBOG	1.2	(2)
職場の仲間	1.2	(2)
その他	2.3	(4)
無回答	75.0	(129)
合計	100.0	(172)

千葉ジェッツの認知度については、73.3%が知っていると回答しており、認知度の高さがうかがえる。その一方で、試合観戦経験は「あり」という回答が 5.8%と低い結果であった。千葉ジェッツができたことによる地域の変化の有無については、望ましくない変化があったという回答が全く無かった一方で、変化なし (53.5%) が最も多かった。

表 12. 千葉ジェッツの認知と観戦について

項目	%	(n)	項目	%	(n)
<b>千葉ジェッツの認知</b>					
知っている	73.3	(126)	<b>観戦回数</b>		
知らない	26.7	(46)	1回	2.3	(4)
合計	100.0	(172)	2回	1.2	(2)
<b>千葉ジェッツ試合観戦経験の有無</b>					
観戦経験あり	5.8	(10)	3回	1.2	(2)
観戦経験なし	69.8	(120)	4回	0.6	(1)
無回答	24.4	(42)	無回答	94.8	(163)
合計	100.0	(172)	合計	100.0	(172)
<b>地域の変化</b>					
変化なし	53.5	(92)	平均観戦回数	2回 (S.D.=1.118)	
やや望ましい変化	17.4	(30)			
望ましい変化	3.5	(6)			
無回答	25.6	(44)			
合計	100.0	(172)			

### (2) 拠点施設近隣住民のソーシャルキャピタル

拠点施設近隣住民のソーシャルキャピタルにおいて、6段階尺度中、4点以上の高い平均値が得られているのは、地域のネットワークを表す「近所の人とあいさつ (4.94)」、信頼を表す「出張・旅行後この地域に帰ってきた時、ホッとする (4.56)」「地域に愛着がある (4.25)」の計 3 項目であった。2点台以下の低い平均値は、信頼の要因である「地域の話し合いに参加する (2.69)」「子供を近所に預かってもらう (2.30)」、互酬性の規範を表す「防犯や交通安全活動への参加 (2.45)」「清掃美化活動への参加 (2.76)」「防災活動への参加 (2.49)」「お祭りなど町内行事の手伝いへの参加 (2.72)」「町内運動会などへの参加 (2.33)」「町内のスポーツ活動での指導への参加 (1.77)」「文化活動への参加 (1.59)」の 7 項目であった。観戦者に比べ

地域活動への参加の低調さがより顕著であった。

表 13. SC 各項目の平均値(近隣住民)

項目	(n)	mean	S.D.
近所の人とあいさつ	(157)	4.94	1.297
近所の人と立ち話	(157)	3.49	1.620
近所の友人知人と連絡	(157)	3.45	1.696
地域に関する話をするところがある	(157)	3.39	1.580
地域での活動に協力することができる	(157)	3.17	1.548
自分が困ったとき地域の人が助けてくれる	(157)	3.04	1.499
地域の話し合いに参加する	(157)	2.69	1.552
地域でお互いへの気配りがある	(157)	3.59	1.502
近所の家との交流がある	(157)	3.60	1.629
子どもを近所に預かってもらう	(66)	2.30	1.549
※:子供がいないサンプル(n=91)を除く			
人からこの地域の悪口を言われたら、何か自分の悪口を言われた気分になる	(157)	3.55	1.253
出張・旅行後この地域に帰ってきた時、ホッとする	(157)	4.56	1.140
地域の人が仲間だと思う	(157)	3.59	1.092
地域に愛着がある	(157)	4.25	1.119
防犯や交通安全活動への参加	(157)	2.45	1.583
清掃美化活動への参加	(157)	2.76	1.691
防災活動への参加	(157)	2.49	1.466
お祭りなど町内会行事の手伝いへの参加	(157)	2.72	1.705
町内運動会等への参加	(157)	2.33	1.566
地域のスポーツ活動での指導への参加	(157)	1.77	1.224
文化活動への参加	(157)	1.59	1.012
町内会行事への関心がある	(157)	3.20	1.372
市議員を出すことは大切	(157)	3.68	1.364
この地域のために何かの役に立ちたい	(157)	3.36	1.127

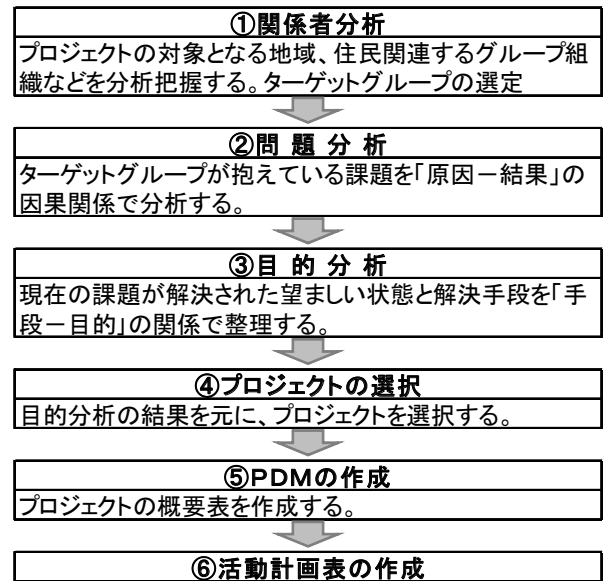
試合観戦者と拠点施設近隣住民のソーシャルキャピタル各項目の平均値を、t 検定を用いて比較した。その結果、表 14 のように、24 項目中 18 項目において統計的に有意な差が認められた。有意差が認められた項目は全て近隣住民より観戦者の方がソーシャルキャピタルの平均値が高い結果となった。拠点施設近隣に住む一般的な住民よりも、地域のプロスポーツチームに関心を持ち試合を観戦する住民の方がソーシャルキャピタルが高いことが推察される。特に「お互い様だから、という支えあい」を表す互酬性の規範の要因の中でも、地域活動への参加項目において、一般の住民よりも試合観戦を行う住民の方が、統計的に有意に高い点が注目される。

表 14. SC 各項目の平均値 観戦者と近隣住民の比較

項目	観戦者			近隣住民			t値	p
	(n)	mean	SD	(n)	mean	SD		
近所の人とあいさつ	(155)	5.03	1.304	(157)	4.94	1.297	0.564	n.s.
近所の人と立ち話	(155)	3.66	1.625	(157)	3.49	1.620	0.948	n.s.
近所の友人知人と連絡	(155)	4.63	1.468	(157)	3.45	1.696	6.608	***
地域に関する話をするところがある	(155)	3.86	1.505	(157)	3.39	1.580	2.651	**
地域での活動に協力することができる	(155)	3.66	1.456	(157)	3.17	1.548	2.932	**
自分が困ったとき地域の人が助けてくれる	(155)	3.79	1.542	(157)	3.04	1.499	4.313	***
地域の話し合いに参加する	(155)	3.10	1.586	(157)	2.69	1.552	2.301	*
地域でお互いへの気配りがある	(155)	3.99	1.501	(157)	3.59	1.502	2.397	*
近所の家との交流がある	(155)	4.20	1.509	(157)	3.60	1.629	3.381	**
子どもを近所に預かってもらう	(91)	3.22	1.679	(66)	2.30	1.549	3.488	**
※:子供がいないサンプルを除く								
人からこの地域の悪口を言われたら、何か自分の悪口を言われた気分になる	(155)	3.72	1.318	(157)	3.55	1.253	1.113	n.s.
出張・旅行後この地域に帰ってきた時、ホッとする	(155)	4.56	1.223	(157)	4.56	1.140	0.006	n.s.
地域の人が仲間だと思う	(155)	3.99	1.279	(157)	3.59	1.092	2.933	**
地域に愛着がある	(155)	4.51	1.197	(157)	4.25	1.119	1.992	*
防犯や交通安全活動への参加	(155)	3.35	1.618	(157)	2.45	1.583	4.981	***
清掃美化活動への参加	(155)	3.41	1.607	(157)	2.76	1.691	3.472	**
防災活動への参加	(155)	3.03	1.481	(157)	2.49	1.466	3.209	**
お祭りなど町内会行事の手伝いへの参加	(155)	3.34	1.588	(157)	2.72	1.705	3.299	**
町内運動会等への参加	(155)	3.01	1.647	(157)	2.33	1.566	3.746	***
地域のスポーツ指導での指導への参加	(155)	2.48	1.601	(157)	1.77	1.224	4.416	***
文化活動への参加	(155)	2.35	1.548	(157)	1.59	1.012	5.098	***
町内会行事への関心がある	(155)	3.63	1.508	(157)	3.20	1.372	2.626	**
市議員を出すことは大切	(155)	3.74	1.424	(157)	3.68	1.364	0.342	n.s.
この地域のために何かの役に立ちたい	(155)	3.59	1.408	(157)	3.36	1.127	1.639	n.s.

\*: p<.05, \*\*: p<.01, \*\*\*: p<.001  
 ※: SCを比較するため、観戦者は習志野台、坪井(舎、東・西)、古和釜、高根台、松が丘の居住者のみ抽出

3) プロチームと住民の共同参画型プロジェクトプロジェクトの枠組みとなる PCM 計画立案は、図 2 のような流れに従い、ワークショップ形式で実施した。



出典:IC Net株式会社「PCM計画立案」を加筆修正

図 2. PCM 計画立案の流れ

PCM の最初の段階である関係者分析においては、プロジェクトの受益者、実施者、政策決定者、財政負担者、協力者、悪影響を被る(恐れのある)グループ、反対者という7つのカテゴリーにそれぞれ該当する関係者を自由に思いつく限り付箋に記入し図3-①のように貼り付けていった。なお、同じ組織や関係者が他のカテゴリーでも重複する場合がある。その上で、何を解決すべき課題とするのか、また仮の(PCM 計画立案の過程で変化することもあるため)ターゲットグループの選定を行った。その結果、仮のターゲットグループとして「千葉ジェッツ」「拠点施設近隣の小中学生」が抽出された。これらの作業において留意すべき点は、あくまでもチ

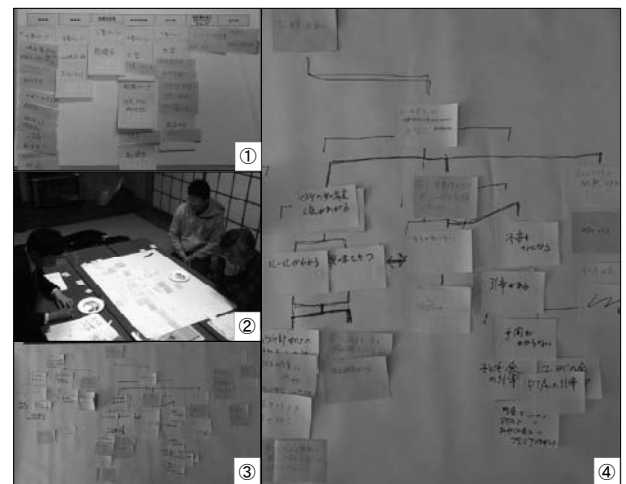


図 3. ワークショップの様子と成果物



ームと住民が主体者となることで、会話が停滞しても回答を導くような手助けを避け、あくまでも主体者が課題に取り組むことが必要となる。図3-②はワークショップの様子である。

ターゲットグループ(以下、TG)の選定後は、TGが直面している課題の全体像を系図と呼ばれる樹形図にまとめ、個々の問題の因果関係で分析・整理する作業となる。今回は、千葉ジェッツと拠点施設近隣地域が協力して解決すべきTGにおける問題を、B1サイズ程度の紙に思いつく限り付箋に記入し、貼り付ける作業を行った。その際に、問題自体を「結果」と解釈し、その結果が起こっている直接「原因」を結果の下に貼り付けることを条件とした。さらに、その原因を結果と置き換え、因果関係を掘り下げていくことで、図3-③のような系図を作成していった。1度系図を作成しても、その後の主体者の話し合いによって因果関係の上下関係や系図自体の再構築が行われるのが問題分析の特徴である。最終的には、千葉ジェッツの試合観戦において「大人が楽しめない」という系図の中心になる問題が抽出された。

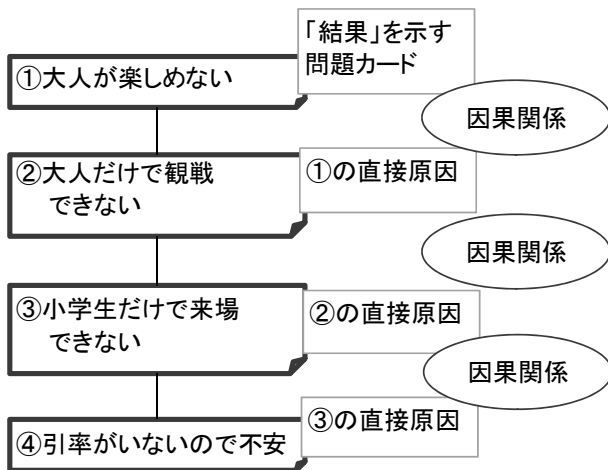


図4. 問題分析の付箋記入例

問題分析に次いで目的分析を行った。問題分析で提示された結果を示す問題カードを、「問題が解決された状況(目的)」に書き換え、さらにその直接原因を目的が達成される手段に書き換える作業を行った(図4および図5を参照)。目的分析においては、目的を達成するために必要な手段が十分であるかを系図の各段階で検討する必要がある。また、新たな手段を加える場合もある。目的分析では、系図が広がっていくのが一般的で、無理に集約する必要はない。また、ヒト・モノ・カネ・情報などの経営資源がある程度見積もりできるレベルまで具体化し、現実的で新たな問題を起こさない内容にすると、その後のプロジェクトに有効となるとされている(IC Net 株式会社, 2010)。

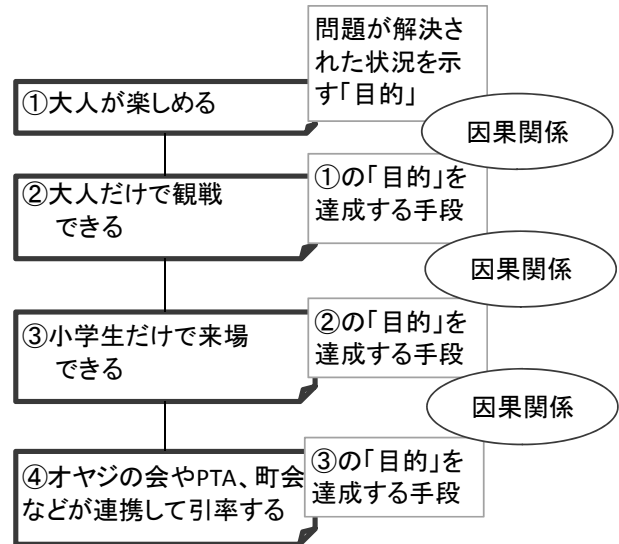


図5. 目的分析の付箋書き換え例

目的分析を終えた後は、プロジェクトの選択となる。今回のワークショップで選択されたのは、中心問題に影響を与える「小中学生の観戦者増加プロジェクト」であった。図3-④がプロジェクトの解決手段群(アプローチ)である。本来、アプローチの選定においては、中心目的への効果、技術的実現可能性、受益者/対象地域の規模、効率性、コスト、社会的受容性、緊急性、環境への影響などの基準に照らし合わせて選定することが求められている(IC Net 株式会社, 2010)。本プロジェクトでは従来PCMが用いられているような発展途上国の開発プロジェクトとは主旨が異なるため、主体者が重要だと考え、かつチームと地域住民が共同するのに適したアプローチを選択してもらった。

選定したアプローチの系図を用いて、プロジェクト・デザイン・マトリックス(PDM)を作成した。PDMはプロジェクトの基本計画書であり、プロジェクトの進捗や運営管理、評価などの局面で参照されるものである(IC Net 株式会社, 2010)。選定したアプローチの最も上位にある段から順に下へ向かって「上位目標」「プロジェクト目標」「成果(アウトプット)」「活動」にそれぞれ当てはめていくことで、プロジェクトの要約が論理的に完成するように設計されている。表15には、本プロジェクトのPDMが示されている。上位目標は中心目的であった「大人が観戦を楽しめる」と「小中学生の観戦者が増加する」が当てはまり、図3-④で作成した系図の各段落がそれぞれ順にプロジェクト目標→成果→活動へと振り分けられていることがわかる。また、PDMには目標の達成度を評価するための指標とその指標データの入手先を示す欄がある。これらの指標をPDCAに基づき評価することで目標や成果の達成度が確認できるようになっている。指標入手先

が明記されており、プロジェクトに関わる人員が変更されても PDM を参考に同様の目標、評価を行うことができるのが特徴である。本プロジェクトでは計画表作成は行わなかったが、現在、PDM に示された活動を推進している。

表 15. 本プロジェクトで作成した PDM

プロジェクトの要約			
上位目標	指標	指標データ入手手段	外部条件
プロジェクトタイトル: 小中学生の観戦者増加プロジェクト 対象グループ: 船橋アリーナ近隣住民 対象地域: 船橋アリーナ近隣地区 期間: 2014年3月~2014年12月 日付: 2014/2/12 バージョン: 0			
<b>上位目標</b> 大人が観戦を楽しめるようになる 小中学生の観戦者が増加する	観戦者数に占める 小中学生の割合の 経年調査	順天堂大学スポーツ マーケティング研究室 の調査	・拠点施設の移転や運営 方法の変更 ・夜間の犯罪の発生 ・小中学校に活動自体を 受け入れてもらえない
<b>プロジェクト目標</b> 小中学校の先生が観戦に 来るようになる	観戦した教員の数	千葉ジェッツからの小 中学校へのヒヤリング	
バasketボール自体の 知名度・人気が上がら ない	小中学校でのバスケ ットボール部の人数、 近隣地区における、 興味・関心の増加	順天堂大学スポーツ マーケティング研究室 の調査	
<b>成果(アウトプット)</b> 小中学校の先生が千葉ジェッツ に興味を持つようになる	観戦した教員の数や 千葉ジェッツへの関心 合わせ件数	千葉ジェッツからの小 中学校へのヒヤリング 問い合わせ件数の把握	
小中学生が観戦に行くことに 不安が無くなる	観戦者数に占める 小中学生の割合の 経年調査	順天堂大学スポーツ マーケティング研究室 の調査	
バasketボールのルールが わかるようになる	小中学校でのバスケ ットボール部の人数、 近隣地区における、 興味・関心の増加	順天堂大学スポーツ マーケティング研究室 の調査	
バasketボールと千葉ジェッツ に興味を持つようになる	観戦者数の増加	毎試合の観戦者数の 推移	
<b>活動</b> 千葉ジェッツが学校の授業を 手伝(体育、夢先生)	<b>投入</b> 人的資源: 千葉ジェッツの選手・育成選手、順天堂 大学スポーツマーケティング研究室との連携	船橋市バスケットボール協 会や教育委員会などとの 交渉	
千葉ジェッツが夏休みの自由 研究の課題を提供する	機材等: 小中学校に関わる地域の各種組織との交 渉、移動のための交通手段(Jet'バスの活用)	順天堂大学スポーツマ ーケティング研究室との連 携の確保	
バasketボール経験のある 小中学生の試合や練習補助	経費: 各活動で使用する用具や機材の費用、活動の 認知を高める広報宣伝費など	船橋市バスケットボール協 会や教育委員会などとの 交渉	
子ども会、オヤジの会、PTA 町会などが連携して引率する			

チーム関係者と地域住民が PCM 立案計画に参加した感想は良好であった。特に、共同で課題解決に当たる点、系図がそのまま PDM の作成に当てはまる点、話し合いなど主観的になりがちなものが論理的に実施計画に結びつく点などに対して評価が高かった。その一方でモデレーターの役割には高いスキルと経験が必要なことが明らかとなった。プロチームと地域住民との共同参画プロジェクトの推進に、PCM・PDM の手法が有効であることが認められるが、現場で実施するには PCM・PDM の手法に熟知し、モデレーターとしてのトレーニングを積んだ第三者が求められる。

5. まとめ

試合観戦者調査では、SC 高群の方が居住年数が長く、千葉ジェッツができたことで地域に望ましい変化があったと感じているという、2012 年と同様の結果が得られた。また、拠点施設近隣に住む一般的な住民よりも、地域のプロスポーツチームに関心を持ち試合を観戦する住民の方がソーシャルキャピタルが高いことが推察される結果であった。

プロチームと地域住民との共同参画プロジェクトの推進に、PCM・PDM の手法が有効であることが認められたが、現場で実施では手法に熟知し、モデレーターとしてのトレーニングを十分に積むことが求められることが明らかとなった。

参考文献

- 1) 舟木泰世・野川春夫 (2012) : 地域コミュニティの再生がスポーツに果たす役割—総合型地域スポーツクラブに着目して—, 文理シナジー, 16(1), pp.7-13.
- 2) IC Net 株式会社 (2010) PCM 計画立案 Project Cycle Management.
- 3) 稲葉慎太郎・山口泰雄 (2009) : 総合型地域スポーツクラブの運営評価に影響を及ぼす要因に関する研究—クラブ・プロフィールとソーシャル・キャピタルに着目して—, 体育・スポーツ科学, 第 18 号, pp.1-10.
- 4) 河原行雄 (2007) : 総合型地域スポーツクラブのソーシャルキャピタルの研究, 平成 19 年度順天堂大学大学院修士論文
- 5) 長積仁・榎本悟・松田陽一 (2006) : スポーツ振興とソーシャル・キャピタルの相互補完的関係—ソーシャル・キャピタル研究の視座と可能性—, 徳島大学総合科学部人間科学研究, 14, pp.9-24.
- 6) 中西純司・行實鉄平 (2005) : 第 11 章総合型地域スポーツクラブと「コミュニティ・ビジネス」; 市民参加のまちづくり—地域の自立と持続可能性—, 創成社, pp.184-207.
- 7) 二宮浩彰 (2011) : プロスポーツ観戦者行動におけるチームに対する愛着とホームタウンへの地域愛着, 同志社スポーツ健康科学 (3), pp.14-21.
- 8) Okayasu, I., Kawahara, Y., and Nogawa, H. (2010) : The relationship between community sport clubs and social capital in Japan—A comparative study between the comprehensive community sport clubs and traditional community sports clubs—, International Review for the Sociology of Sport, 45(2), pp.163-186.
- 9) 高千穂安長 (2009) マクロプロジェクトの成功要因についての研究—川崎市スポーツイベントプロジェクトを通して—, Macro Review, Vol. 22, No.1, 29-39.
- 10) 渡辺淳一 (2010) 国際協力でのプロジェクト・マネジメントプロセスとは—, 国際地域学研究 第 13 号, 157-168.

この研究は笹川スポーツ研究助成を受けて実施したものです。

